発達理論の学び舎

Back Number: Vol 114

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2261. 協働

2262. 日記とこれから

2263. 幸福な昼食時

2264. この世界に仕えて

2265. ある書籍との出会い

2266. Spirits in Action

2267. 二つの夢

2268. 夢を見ない深い眠りの意識について

2269. 学び直し

2270. 成長の可視化とシミレーションに

2271. 構成的な意識の中で

2272. 数理モデリングの学習に向けて

2273. 発達現象のシミレーションに向けて

2274. 夢見の意識下の心象イメージと自己超越体験について

2275. インターン12日目の朝

2276. ダイバーシティの問題と相対主義的段階の問題

2277. 地味さと尊さが息づく研究

2278. 疲弊の原因とその対策

2279. 夢の中の美的世界

2280. メンタルモデルの構築支援

© YOHEI KATO 2018

2261. 協働

今朝も比較的ゆっくりと七時前に起床した。就寝時間はいつもと同じ夜十時であったことを考えると、随分と睡眠時間を取っていることがわかる。十分な睡眠時間のおかげか、静かに湧き上がる活力のようなものを感じながら一日の活動を開始することができた。どうやら今日は晴れ時々曇りの天気のようだ。

早朝のフローニンゲンの空は、うっすらと青い雲に覆われている。ここから少しずつ雲が晴れたり、雲が現れたりする天気が続くのだろう。昨夜の段階での天気予報は、今週の金曜日は曇りとのことであったが、どうやら雪が降るらしい。そして、続く土日は極めて寒くなり、最適気温はマイナス6度になるようだ。

完全に春が来たと言える日が来るのはもう少し先のようである。今日はこれから協働プロジェクトに関する仕事が一件ほどある。この案件に関しては、昨日協働者の方と打ち合わせをしたところ、来季もまた継続する方向になった。

これは正式な決定ではないが、継続の方向でほぼ間違いないそうである。この案件については詳しく書かないが、このプロジェクトを通じて関わる方たちの人数を考えると、非常に意義のあるものだと思っている。プロジェクトを通じて関わる方たちというのは、もちろん私と直接に仕事を共にしていく人たちを含むが、その方たちが社内で関わる人たちも含む。一つの仕事の背後には、無数の人たちの関与がある。

目には見えないところで様々な人的ネットワークが構成されており、一人の方と仕事を共にすることは、その方が繋がっているネットワークにも影響を与えていく。今回のプロジェクトの関わり方はまさにその側面が強い。

すなわち、ネットワーク上で鍵を握る方と共に課題の解決に向けて協働をすることによって、課題を取り巻くネットワーク全体に影響を与えていくということが重要な目的である。一人の人間の仕事の背後には、常に他の多くの方たちの仕事があるということ。

© YOHEI KATO 2018

この社会は、そうした目には見えないところで働いている人たちの仕事によって成り立っていることを改めて実感する。自分の仕事もまさにそうした一つとしてこの社会に関与できたらと思う。今日の仕事もまたそうした関与の一つとなるだろう。

午前中の協働プロジェクトの仕事が終わり次第、すぐに自宅を出発し、「デジタルラーニングと学習環境」のコースのクラスに参加する。早いもので今日のクラスは第五回目だ。このコースを担当しているのは、私の研究アドバイザーであるミヒャエル・ツショル教授であり、いつもこのコースを通じてツショル教授から多くのことを学んでいる。デジタルラーニングについてはこれまで実践しかしてこなかったため、より良い学習環境をデザインするための概念や理論というものが私にはほとんどなかったように思う。

そうしたことからも、このコースを通じて様々な概念や理論と実証結果などについて学びを得ることは、これから私がデジタルラーニングの環境をデザインしていくために非常に役に立つ。クラスの休憩時間に、グループ課題を一緒に取り組んでいる友人のハーメンと今後の作業について簡単に打ち合わせをする。ハーメンとのラインミーティングは今日ではなく来週であることを昨日になって気付き、今日の打ち合わせでは課題の進行とタスクの分担について簡単に話し合っておこうと思う。
フローニンゲン：2018/3/14（水）07:35

No.866: Prehension by Whitehead

I agree with the possibility of Whitehead's notion that the internal universe is contiguous with the external one. Not only humans but also something like atoms might have a primitive form of consciousness, which is called "prehension" by Whitehead.

However, how can we prove it? In other words, how can we differentiate prehension from a force surrounding the object (e.g., atoms may be able to move not by their prehension but by the atomic field)? This way of my thinking may derive from the reductionistic scientific mind.
Groningen, 15:46, Sunday, 3/18/2018

2262. 日記とこれから

早朝の空が少しずつ晴れてきた。ライトブルーの空が顔を覗かせ始めると、どこか心も透き通っていくかのように感じるから不思議である。内外の世界はそのような形で繋がっているようだ。昨日は改めて日記について考えていた。

日記という対象について深く考えていたというよりも、日記の持つ意義を深く実感していたというような経験をしていた。もはや日記を書かずして自分の仕事は前に進んで行かないであろうし、自分の日々が進んで行くことはないだろう。仕事の土台はこの日記にあり、自分のいかなる創造物もこの日記の延長線上にしかありえないことを強く感じる。それは協働プロジェクトにおいても、学術研究においてもそうである。

また、作曲実践という一つのライフワークに関してもそうである。それらの仕事を通じて創造されるすべてのものは、この日記を起点に生み出されるものであることがはっきりと分かり始めている。絶えず日記を書きながらゆっくりと仕事を前に進めていくこと。私にできるのはそれしかないだろう。日記を執筆することによって、自分自身、そして日々そのものを深めていく。これからも日記を書き続けていきたいと思う。

昨夜は就寝前にいくつか重要なことについて考えを巡らせており、あるテーマについてまた新しい考えが生まれた。それについて頭の中であれこれとつぶやき、時に実際に口に出してつぶやいていた。だが、興味深いことに夢と同じで、そのテーマが何であり、何をつぶやいていたのかについてはもはや覚えていない。ただ、自分の内側にそのテーマに関する新しい考えが生まれたという感覚だけが今この瞬間に残っている。

おそらくその考えは、今後また何かの機会に顔を覗かせるだろう。その際には、文章の形で書き留めておくことをしたい。

欧州での日々は相変わらず自然な形で着実と進んでいく。とりわけ二年目の生活では、欧州の土地にくつろいだ形で日々を過ごすことができている自分がいることに気づく。自分の仕事も内面の成熟も、どちらもゆっくりとしか進んで行かない。仕事の進行と内面の発達の特性を考えてみた時、欧州に堆積された時間の中でじっくりと自己と仕事に向き合うことはどれだけ意味のあることか。

果たして秋から再び米国に戻ることになるのかはまだ決定していないが、欧州での残りの日々も、緩やかに全てを前に進めていくような形で過ごしたいと思う。自己も仕事もゆっくりと深めていく。その意識と実践が何よりも大切だ。フローニンゲン：2018/3/14（水）07:53

No.867: Fallacy of Misplaced Concreteness and Models

When I formulate a model──any conceptual or mathematical model, I have to be careful with not to perpetrating the “fallacy of misplaced concreteness,” which Whitehead coined. To put it differently, I must recognize the difference between abstraction and concreteness. Formulating and utilizing any models encapsulates the danger of committing the fallacy. Groningen, 15:53, Sunday, 3/18/2018

2263. 幸福な昼食時

今日は晴れ時々曇りの予報であったが、なんとも素晴らしい天気だった。午前中に「デジタルラーニングと学習環境」のコースの第五回目のクラスに参加し、クラスが終了すると、その足で行きつけのインドネシアレストランに向かった。今日は少しばかり外食をしたい気分であった。特に誰かとランチを共にしようと思ったわけではなく、私は一人でインドネシアレストランに向かった。

キャンパスを後にし、ノーダープラントソン公園の中を通っている時、そこでの景色がいつもより輝いて見えた。クラスの途中で友人のハーメンと話をしている最中、春がやってくるのはまだ先のようだとお互いに話していた。確かに今日も気温は高くないのだが、太陽の光は春を感じさせるものだった。暖かく優しい太陽に身を包まれながら歩くことは実に爽快であった。

インドネシアレストランに到着すると、二人のインドネシア系オランダ人の男性が食事をしている最中だった。店内に入り、顔見知りの店員に挨拶をした。奥から店主の女性が顔を覗かせ、開口一番、今日の天気の良さについて話し始めた。その店主の女性が今日の申し分ない天気について指摘すると、私は再びレストランの窓の方を見て、光り輝く外の景色を眺めた。

今日はいつもとは異なり、持ち帰りでランチを注文するのではなく、店内でランチを食べることにした。顔見知りの店員は「いつものでいい？」と笑顔で私に質問をした。私はいつもと同じメニューを注文し、今日は久しぶりに店内で昼食を摂った。昼食を食べている最中も、私は時折窓の外の景色を眺めていた。

幾十にも重なる光の束が空から降り注ぎ、それが外の世界を輝かせていると思った。確かに外の気温はまだ寒かったが、店内は暖かく、スパイスの効いたインドネシア料理を食べ終える頃には額に汗をかいていることに気づいた。注文した料理を平らげると、店主の女性と料理を運んでくれた店員に挨拶をしてから店を出た。今日はちょっと散歩をしたい気分だったので、フローニンゲンの中心街の方に向かって私は歩き出した。

そのようなことを思い出しながら、今私は再び自分の書斎にいる。天気が良く、太陽が燦然と輝いている様子は今もまだ続いている。太陽の光を浴びていたいのだが、その光が強いため、今は書斎のカーテンを閉めている。ただし、窓は開け、窓から入ってくる春を予感させる風を感じている。今日もとても幸福だ。フローニンゲン：2018/3/14（水）15:23

2264. この世界に仕えて

今日も確かに自分は生きていた。そんなことをふと思う。

時刻は夕方の四時を迎えた。フローニンゲンの街において、この時間帯から午後の五時に向けてが一番気温が上がる。今の気温は10度近くに達している。太陽の光が燦然と輝き、どこか自分が天上界にいるような気持ちになる。それぐらいにこの世界が輝いており、その輝きは内面世界の全てを包んでいる。

今日の昼食時に、行きつけのインドネシアレストランに立ち寄った際、店主の女性が「ようやく暖かくなってきたわね。これで人々も抑鬱的な表情から明るい表情になるわ」と身振り手振りを交えながら笑って述べていた。本当にその通りだと思う。

欧州での二年目の生活において、私は特に抑鬱的な精神状態を経験しなかった。それは欧州一年目に洗礼のように十分に経験した。欧州の二年目の冬は、自分の精神がまた一歩別の次元に

深まっていたような感覚があり、特に自覚的に抑鬱症状を感じることはなかった。しかし、今日インドネシアレストランの店主の話を聞いて、もしかしたら今の私が感じているこの何とも言えない解放感というのは、抑鬱的な状態から次の状態へ移行していることの印なのかもしれないと思わされた。

そのようなことを思った時、一昨日の夜に考えていたテーマを思い出した。それは自我の拡張に関するものであった。言い換えると、寝床で自己肥大化現象について考えを巡らせていたことをふと思い出したのである。私はよく、自分の自己が肥大化する現象を感じることがある。

厳密にはそれは自我と述べた方がいいのかもしれないが、あえて自己と記しておく。こうした日記を書いている際、知らず知らずに自己が肥大化し、その肥大化した自己を通じて文章を書こうとする自分が姿を見せることがある。一方で、そうした自己の肥大化現象が起きた際には、それを正す自分が常に存在するようになった。これは肥大化した自己を抑圧するのではなく、それを完全に切り倒し、新たな自己を一から構築することを仕向けるような力を持つ自分の別の側面である。

以前、自己に批判の矢を向ける自分について批判する日記を書き記していたように思う。そこでは自己に批判の矢を向けるのではなく、なぜ矢を射ることをしないのか、という反語形式の自問がなされていた。もう自己に批判の矢を向けるような甘さを捨てようと思う。自己は自らの批判の矢に射抜かれなければならない。

そうでなければ、自己に付着した諸々の幻想的な構築物を振り払うことなどできはしない。「批判の矢に射抜かれなければならない」というのは、社会慣習的な文句ではない。そんなべき論は、今の私には全く役に立たない。ここでの命令は社会慣習的なものでは決してなく、自己が自己を超え出て行く際に不可欠なものである。とにかく矢を自己の中心に向かって射抜こうと思う。そんなことを一昨日考えていたことを思い出していた。

毎日毎日毎日、自己がどこか遠くの世界に向かって歩き続けていることを知る。この自己をそろそろ本当に信じ、全てを委ねてもいいのかも知れない。この世界への見えない執着が自分の中にあることを嫌というほど思い知る。自分の日々の歩みは、この世界に遣わされた者としての歩みであることを最近強く実感している。

© YOHEI KATO 2018

この感覚は、自分の生き方や人生観というものを大きく変えるきっかけになっている。今日行った一つの仕事。それは確かに自分が成し遂げた仕事なのだが、果たしてそれは本当だろうか？という問い。私は、自分が何かこの世界の大きなものに仕えているような気がするのだ。この感覚は単なる自己肥大化によってもたらされるものではないように思える。むしろ、肥大化した自己を制し、自己を超越し始めた際に体験される感覚なのではないかと思うのだ。

フローニンゲンの空の太陽はまだまだ光り輝いている。フローニンゲン：2018/3/14（水）16:32

2265. ある書籍との出会い

書くことが見つかってから書く、というのであっては話にならない。そんなことを自分に言い聞かせる。何を書こうとしているのか全くわからないのだが、とにかくまだ何かを書き残している感覚が残っている。今この瞬間に書斎の窓の向こうに見える太陽のように、激しい何かが自分の内側にあるのがわかる。

どうやら太陽は外側の宇宙に存在しているだけではなく、自分の内側の宇宙にも存在しているようだ。もしかすると、外面世界に存在する森羅万象の全ては、実はそっくりそのまま自己の内面世界に存在しているのかもしれない。少しばかり心を落ち着かせるかのように、内側から出てこようとするものをゆっくり文章の形にしようと思う。

今日はまた一冊の書籍との幸運な出会いがあった。昼食前に、「デジタルラーニングと学習環境」のコースのクラスに参加した際、途中の休憩時間に、社会学部の建物にあるトイレに向かった。この建物の一階には、教授たちがもう読まなくなった書籍が寄付されている場所がある。実際にはそれらの書籍は、廊下に置かれた一つの長机の上に陳列されている。大抵はオランダ語のものなのだが、中には英語の書籍も混じっている。思い起こせば、私はこの二年間において、何冊か非常に貴重な書籍をこの場で入手することができたように思う。

今日もトイレに行くついでに、このテーブルの前を通った。すると、一冊大変興味深いタイトルの書籍が置かれていた。それは、“The Call of Service: A Witness to Idealism (1993)”という書籍だった。このタイトルと書籍全体が醸し出す雰囲気が私を強く惹きつけた。

フローニンゲン大学に来てから、科学の世界に本格的に浸るようになり、この手の書籍を読む機会は滅法減っていた。科学的な専門書でもなく、厳格な哲学書でもない。これは単なる一般書であり、日本でよく翻訳出版される類の書籍のように思えた。中身をパラパラと眺めてみると、やはり文体も記述方法も一般読者を対象にしたものであることが一目瞭然であった。

しかし、この書籍には何か非常に大切なことが書かれているように思った。それは専門的な科学書であるとか、厳格な哲学書であるとかは関係ない。何か大切なこと、とりわけ真理につながる事柄がこの書籍の中に散りばめられているように思えたのだ。ここ最近私が感じていた、この世界からの促しと世界への奉仕という事柄に関係するようなタイトルは、何か運命的なものを感じざるをえなかった。

本書のタイトルの中に散りばめられているのは、「使命」と「使役（あるいは奉仕）」という言葉である。私は、本書とのこの出会いも、この世界からの促しによるものなのではないかと思う。クラスの休憩の最中に本書と出会う幸運を得た私は、大切に本書を手に握りしめ、教室に戻った。

昼食後、フローニンゲンの中心街を散歩している時、日本語で日記を書くように、作曲を通じて自己を表現する日が来るだろうか？ということを考えていた。それはちょうど、フローニンゲンの街の象徴であるマルティーニ塔の前で得られた問いだった。

私が自らの英語に期待しているのは、もはや科学や哲学の領域における論文を書くことだけであり、逆に日本語にはそれらを一切期待していない。日本語と英語の役割が自らの中で明確になっていく。そうした最中にあって、作曲という音楽言語を通じた表現行為は特殊な立ち位置にあるように思う。ここでもおそらく、音楽大学や音楽院を卒業した作曲の専門家は、学術論文を執筆するような形で作曲を行っていくのだろう。

私にはそんなことはできないし、それは私の望むことでは決してない。学術論文のような曲は作らない。ただ、膨大な数の日記のような曲を作り続けるだけである。しかも、それは誰かのために書くわけでも、もはや自分のために書くわけでもない。ただ書くためだけに書き、書くことすらを超越するために書き続けるという意思がある。マルティーニ塔を見上げ、自宅に戻る決心がついてからもこのテーマについて考えていた。

© YOHEI KATO 2018

日本語で日記を記すかのように、それでいて日記には表現できないものを自由に表現するところまで、作曲技術を高める精進を日々行っていきたい。その道のりがどれだけ遠くても、決して歩き続けることをやめないだろう。フローニンゲン：2018/3/14（水）16:56

2266. Spirits in Action

エメラルドブルーの美しい空がフローニンゲンの夜空に広がっていた。夕食を撮りながら、私はその空を感慨深く眺めていた。

日記を書くことに関してふと、構築された自己をさらに探求するような無意味な形で言葉を紡ぎ出すのではなく、そうした自己を超えた存在の言葉を翻訳する形で文章を書いていく機会が増えてくるかもしれないと思った。

先ほど、「自分は一体何者であるのか？」という問いからそろそろ離れる時期に差し掛かっている自己を見た。この問いはおそらく幾つになっても大切なのだろうが、そうした問いをもとにした自己探求なるものだけを続けては意味がないと思った。自分が一体何者であるのかと問いたくなる気持ちは重々理解している。先ほども私は、日本語で構築された自己性と英語で構築された自己性の狭間に入り、それらの両者を中空の視点から捉えていた。

また、両親が与えてくれた自分の名を眺めた時、その名を付して生きているその人間は一体誰なのかと問いたくなるのも理解できた。日本、米国、欧州で構築されたこの自己なるものは、いずれも建設された何かであることは疑いようがない。「では、それを建設した存在は何なのか？」というのが焦点だ。それは名を超えた自己とほぼ同義なのではないかと思う。

時刻が夜の七時半を過ぎた頃、フローニンゲンの空はようやく暗くなった。日は伸びる一方だが、気温は相変わらず低いというのが、今のフローニンゲンの様子だ。「フローニンゲンで自分は一体何をしているのか？」と問いたくなる自分がいるのは理解できるし、それはいつものことである。もっと本質的な問いを投げかけることはできないのかと問い返したくなるが、それはそれで大切な問いなのかもしれない。

もしかすると、私は相も変わらず毎日、フローニンゲンに自分がいることの意味やここでの日々の活動一つ一つの意味を問い続けているのかもしれない。この不毛にも思える問いの流れに組み込まれることによって、少しずつではあるが、毎日一つ一つ新たな意味が見えてくる。

意味ほど無限の広がりと深さを持っているものは他にあるのだろうか？

今日の昼食後、フローニンゲンの街の中心部を歩いている時、この物質消費的社会の有り様に違和感を覚えている自分がいた。なぜ人々は有限な物品を求めようとし、どうして無限の広がりと深さを持つ意味を求めようとしないのか。いや、意味など求めようとしてはいけないのだ。意味は既製品として獲得されるものではなく、意味は新しく創造されるものだ。

そして、意味は無限に深められていくものである。物質消費的な社会の様相が色濃く現れた街を歩きながらも、幸せな瞬間があった。それは、街の中心部の市場付近にある路上の花屋に置かれた花々を見た時だった。おそらく、そこに置かれた花々も、それが売買される対象であるから物質消費的な社会の産物であることには変わりないのかもしれない。

しかし、花々の香り、そしてそれらが発する何とも言えない存在エネルギーに対して、私はその場で足を止めざるをえなかった。その花屋は私が心から落ち着ける場所の一つなのかもしれない。この世界には、局所的にそうした場が点在している。社会全体がそうした場にならないだろうか。

関与の問題。自分の仕事に関しては、毎日毎日問い続けなければならない。自己を探求することから、いかにこの社会に参画・関与することを模索するようになったことが、欧州での二年目に起こった大きな変化の一つだろう。この社会に真に参画するためには、真に関与を開始するためには、まずは自分が何者であるかを理解し、何者かになる必要があった。

自分という存在が何者であるかというのは、今後は自分から問うというよりも、この世界から問われるべきものであり、それに行動を通じて応えていくことが大切なのだと思う。

“spirits in action”という言葉。これは、私が米国ジョン・エフ・ケネディ大学にいた時に初めて目にした言葉であり、七年前の私には全く意味がわからなかった。文字としての意味なら誰でもわかるだ

ろうが、その深層的な意味は当時の私にはわからなかった。しかし、今ならその言葉の意味がわかるように思うのだ。フローニンゲン:2018/3/14(水)20:04

2267. 二つの夢

今日もここ数日間と同じように、七時前に起床するというゆったりとした目覚めになった。目を覚ましてみると、辺りはすでに明るくなっており、今はライトブルーの空が広がっている。裸の街路樹の枝が風に揺られている。近くから小鳥の鳴く声が聞こえてくる。天気予報では今日は曇りとのことであったが、今は雲はほとんどなく、晴れた空が広がっている。これからゆっくりと一日の活動を開始したい。

今朝方の夢について少しばかり振り返ってみると、いくつか印象に残っている場面がある。一つは、ある男性アイドルグループが森の中で歌を歌っている撮影現場に立ち会ったことである。彼らの歌がなんというタイトルなのかは全くわからず、彼らのグループ名もわからない。ただし、その風貌からして日本のアイドルグループだと思う。

森の中で彼らが歌っている歌を聴くと、どうもそれほど歌唱力があるようではないようだ。撮影現場には、間隔が揃った木が無数に植えられており、両隣の木の間に一人一人のメンバーが立っている。すると、曲の進行に合わせて、こちらに向かってくるような形で、両隣の木々にいる二人が次々と私の方に迫ってくる形で歌を歌い始めた。そこはどうやらサビの場面だったらしく、その箇所が終わったところで、メンバーが木々の間を瞬間移動する光景が止んだ。

曲が終わった後、私はメンバーの一人がインタビューか何かに答えている姿を目にした。その男性アイドルは日本人だが、スイスで生活をしていた期間が長いようだった。

インタビューアー:「普段日本語はどれくらい話しているのですか?」

男性アイドル:「日本語ですか?今はできるだけ日本語で生活をするようにしてますよ」

インタビューアー:「スイスでの生活が長いそうで、スイス語は普段どれくらい話しているのですか?」

男性アイドル:「スイス語？あぁ、フランス語ですか。フランス語は移動する車の中だけで話してるような状況ですかね」

男性アイドルの最後のコメントを聞いたところで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は立派なビルの中にある大きな会議室にいた。その会議室には椅子が何個も置かれており、これから重要な会議が始まるようだった。私は一階に降りて、以前の会社の上司数名を迎えに行った。

一階に降りると、すぐに元上司たちと会うことができ、彼らをエレベーターに乗せて部屋まで案内することになった。上司と私たちは久しぶりの再会であったため、エレベーターに乗りながら近況を報告し合っていた。エレベーターが目的階に到着し、先に元上司たちを下ろしてから、会場まで案内した。会議室に到着し、元上司たちが受付を済ませると、私は一旦自分の席に戻った。

私は会議の前半部分の司会進行を務めることになっており、その準備が必要だった。準備を進めようとしていると、近くにいた友人が私に声をかけ、簡単にご飯を済ませないかと提案してきた。あまりそれどころではなかったため、一旦は断ったが、準備に目処が立ってから、こちらの方からまた友人に話しかけた。友人と共に持参したカレーを食べることにし、その前に私はトイレに向かった。

トイレに到着すると、突然めまいのような現象に襲われた。正確には、それはめまいというよりも睡魔だった。突然の睡魔に私は思わず瞼を閉じそうになり、その瞬間に目を覚ました。フローニンゲン:2018/3/15(木)07:36

2268. 夢を見ない深い眠りの意識について

今朝方の夢について、今また少し考えを巡らせている。とりわけ目覚める瞬間の場面が印象に残っており、夢の中でさらに深い夢の世界に落ちるという現象はどのような意味を持っているのだろうか。この現象を自覚的に捉えることができるようになったのは、欧州での二年目の生活が始まってからだったように思う。夢の中で、自分が眠りに落ちる瞬間というのを捉えることができるようになり、一方でそこからさらに深い眠りの世界に行くことを拒絶するような自分がいるのも確かだ。

今日もまさに、私は夢の中でさらに深い夢の世界に落ちていくことを拒んでいた。なぜそれを拒んだのか、そしてさらに深い夢の世界はどのようなものなのかに関する関心は絶えない。

思い出してみると、夢の中でさらに深い眠りに落ちる直前、自分の心身がとても重たく感じられた。あるいは別の表現で言うと、心身が脱落する感覚があった。

「身心脱落」という本来の意味は、自己が身と心の束縛から解放され、真の自己に至ることを指しているのだろうが、夢の中でのそれは何かためらわさせるものを含んでいた。もしかすると、心身が脱落し、深い夢の世界に入っていくことは真の自己へ近づいていくことなのかもしれないが、それを行うことを拒絶していた自分がいることからも、事態はもう少し錯綜としているようだ。

夢見の意識から夢を見ない深い意識に移行することは、サトル意識からコーザル意識への移行だと説明されることが多い。まさに私は夢の中で、コーザル意識に入っていく自覚があり、そこに入っていくことを自覚的に拒んだ。夢すらも見ない深い眠りの意識の世界には何があるのだろうか。インドの聖者ラマナ・マハリシの言葉に、「夢を見ない深い眠りの意識の中で目覚めていない者は本当の覚者ではない」というものがある。

真に自己に目覚めた者は、コーザル意識のさなかにあっても自覚的な意識を保つことができるようだ。それはこれまでの私には到底不可能な芸当のように思えたが、ここ最近コーザル意識に入る直前の状態を捉えることが可能になり、そこに参入することを自覚的に拒むことができつつある自分を見ていると、夢を見ない深い眠りの意識の中で絶えず目覚めていることは不可能ではないように思えてくる。

コーザル意識に関して今は特に仮説のようなものはなく、どのようにすればその意識状態の中で絶えず気づきの意識の状態を維持しうるのかに関する仮説的な方策も特にない。ここからさらにコーザル意識について理解を踏まえていくためには、コーザル意識に参入する寸前を自覚する体験をもう少し積む必要がありそうだ。

起床直後に出ていたうっすらとした雲は消え、今は青空が広がっている。今日は少しばかり風が強いようであり、裸の街路樹の木々が風に揺られている。

© YOHEI KATO 2018

私という自己も、今日も左右前後に揺られながら、進むべき道を歩き、行くべき場所に向かって進み続けていく。フローニンゲン:2018/3/15(木)08:34

No.868: Diary-Based Teaching

It might be intriguing to me that I can offer a lecture based on my diaries. Of course, the purpose of writing a journal is not to give a lecture. However, I suppose that traditional teaching based on academic texts is not so alive. It often lacks vital energy that has to exist in curiosity. Groningen, 09:22, Monday, 3/19/2018

2269. 学び直し

今日の気温は相変わらず低いのだが、それでも太陽が朝から燦然と輝いている。地上に降り注ぐ太陽の光はとても優しく、書斎の中に入ってくる太陽光は部屋を温めてくれる。

今日は午前中に協働プロジェクトに関する仕事に取り組んでいた。現在、企業人の発達支援やアセスメントの開発等、様々な種類の協働プロジェクトに参画させていただく中で、随分と色々なことを考えさせられている。これまで取り組んでいた事柄から少し領域を外に広げる形で諸々のプロジェクトに参画させていただくことは、自分の中で大きな学びになっていることは間違いない。以前の日記で、プロジェクト学習について述べていたように、私たちは仕事を通じて、とりわけプロジェクトを通じて成長していくのだということを改めて実感している。

成長支援に関する臨床的な関わり、すなわちコーチングやメンタリングについては、過去も行っていたことである。しかし、現在取り組んでいるプロジェクトを通じて、成長支援コーチングについても再度大きな学びをいくつも得ている自分がいることに気づく。クライアントの成長を支援する立場に私はいるが、セッションの一つ一つを通じて、本当にこちらまで小さな成長を実感することができているのは不思議なことである。おそらくこれこそが「相互発達」という現象なのだろう。

クライアント企業に属している一人一人の方々とセッションを通じてお話をさせていただける機会というのは非常に貴重であり、毎回のセッションでは常に私も新たな気づきと発見を得ている。一方で、

現在のプロジェクトを通じて改めて思ったのは、ここで再度、臨床技術について学び直す必要がある、ということだった。

人が一生涯をかけて継続的に成長を実現させていくためには、絶え間ない学び直しが必要になるだろう。今の私は、とりわけ成長支援に関するコーチングの理論と技術を学び直す必要に迫られている。こうした学び直しに迫られるというのは、非常に有り難いことである。数日前から、本棚にある臨床心理関係の書籍を取り出し、それらを読み進めるようにしている。

米国を離れて以降は、臨床理論と臨床技術に関するワークショップに参加することはめっきり減っていた。この秋から再び米国に戻ることになったら、それをきっかけに、再びこうしたワークショップに参加することによって学び直しを行っていきたいと思う。

人間発達に関する科学的な研究と哲学的な探究、そしてアセスメントの開発とその実施のみならず、臨床に関する仕事も自分の中で非常に大切にしているものであるため、協働プロジェクトの種類に応じて積極的に学び直しを行うことと、新たな分野の学習を進めていくことを合わせて行っていきたい。社会からの要請によって、自分にできる形でこの社会に関与していき、そしてそうした要請に基づく形で絶え間ない学び直しを行っていくようにしたい。

裸の街路樹の木々が風に揺られている。いかに風に揺られようが、木々はそこにあって自分の役割を果たしている。そして、これらの木々は春にはまた花や実をつけ、着実に成熟の歩みを進めている。社会の風に揺られながらも、その場で自分にできることを担っていくという態度。これが自己と社会の実りにつながることを信じて、今日もまた午後からの仕事に取り掛かろうと思う。フローニンゲン：2018/3/15（木）13:17

No.869: A Spring Wind

A strong wind was blowing last Saturday and Sunday. However, the wind had intrinsic rhythms. I was feeling the dynamism of the spring wind. Groningen, 09:47, Monday, 3/19/2018

2270. 成長の可視化とシミレーションについて

天気というのは本当にダイナミックシステムだと思う。おそらく、数日先ぐらいの近未来の天気の予測は可能だと思うのだが、それより先の将来になるとその予測は難しい。これは人間の成長に関するシミレーションにおいても当てはまるとつくづく思う。昨年はとりわけ、複雑性科学の一領域であるダイナミックシステム理論の観点から人間発達についての探究を進めていた。

今もこの分野への関心は強く、実際、現在取り掛かっているMOOCに関する研究に対して複雑性科学の研究手法を活用している。天気の予測や人間の成長の予測が難しいのは、ひとえに天気も人間もダイナミックシステムであるからだろう。それらを構成する要素の相互作用や、システムを取り巻く要因との相互作用は発達プロセスに思わぬ形──そして思わぬ度合い──の影響を与える。複雑性科学の中で最も有名なのは初期値問題だと思うが、初期値がわずかばかり異なるだけで、その後のシステムの挙動は大きく変わる。

天気や人間の変化のプロセスをシミレーションするのが難しいのは、こうした初期値問題と密接に関わっているだろう。人間の成長プロセスの可視化、およびそのシミレーションは昨年から特に力を入れて取り組んでいるテーマである。特に、フローニンゲン大学のポール・ヴァン・ギアート教授と昨年の私の研究アドバイザーであるサスキア・クネン教授は、成長のシミレーションに関して非常に大きな貢献を果たしている人物である。

彼らから学んだ理論や方法を使えば、確かに成長のシミレーションは可能なのだが、それでも常に上記の問題が付きまとうことは確かだ。そのため、現段階において成長プロセスのシミレーションを行う際に注意しなければならないのは、たった一度のシミレーションをもってして、長期的な成長を予測してはならないということだろう。

そうではなく、天気を数日単位で予測していくかのように、小まめにデータポイントを取得して、シミレーションの予測精度を高めていくことが必要になる。データポイントを随時取得していく形でシミレーションを繰り返していければ、その精度は向上していくだろう。その際に重要なのは、やはりデータポイントを取得するためのアセスメントやツールの開発であろう。既存のアセスメントやツールをいくつか調べてみると、興味深いものがあることは確かである。

それらを活用して十分なデータポイントを取得するというアプローチと、もし仮に特定の領域に関する成長を予測する必要があるのであれば、それにふさわしいアセスメントを開発するというアプローチがある。

まだプロジェクトとして正式に立ち上がってはいないが、現在アセスメントの開発を含め、成長の可視化と予測に関する協働の話を何件か頂いている。このテーマは私も非常に関心があり、学術的な研究に留まるのではなく、実務の世界での適用を行いたいと考えていたため、プロジェクトの話が進んでくれることを願う。

昨年に複雑性科学の領域に身を置き、今年は実証的教育学の領域に身を置いてみると、成長の可視化とシミレーションに関して、既存の発達心理学の測定手法に囚われる必要はないのではないかという考えが強くなっている。特に、構造的発達心理学の測定手法は時間と手間がかかりすぎるため、企業社会からのアセスメントの要請に直ちに答えていくのは難しいことが多い。もちろん、そうした要請に応える形でアセスメントを開発することは可能であるし、それもまた現在話に上がっている協働プロジェクトの一つである。

一方で、個人や組織の構造的な成長を可視化する際に、例えば複雑性科学の手法を用いれば、構造的発達心理学の枠組みで取得したデータのみならず、より簡便的に取得した時系列データの構造特性を明らかにすることができる。これも構造的な発達の可視化に他ならないというのが、複雑性科学と発達科学を架橋した近年の研究者たちの見解であり、私もそのように考え始めている。来季から、アセスメントの開発と成長の可視化とシミレーションに関するプロジェクトに従事することができれば幸いだ。

この日記を書き始めた時は全く別のテーマについて書こうと思っていたのだが、冒頭の天気の話から派生した話題について書き続けている自分がいたことに気づく。そう、天気はダイナミックシステムであり、明後日からはまた最高気温が0度になる。

そして早朝の天気予報とは異なり、明日は雪ではなく、なんとか曇りの中で一日を過ごせそうだ。明日の最低気温はマイナス6度であり、インターン先のオフィスに行く時は随分と寒いだろうと思われる。来季からの期待を胸にまた明日を過ごしたいと思う。フローニンゲン：2018/3/15（木）15:35

No.870: Two Directions of Creativity

In the morning, I was reading Wilber's latest book. I found two interesting and different directions of creativity. One is an involutionary direction to create something out of nothing. The other one is an evolutionary direction to create something out of everything. I hope that my daily practice involves both directions of creativity for this reality. Groningen, 10:48, Monday, 3/19/2018

2271. 構成的な意識の中で

人によっては「陰鬱な」と表現するかもしれないが、非常に落ち着きのある灰色の空がフローニンゲンの上空を覆っている。気づけば今日も夕方の五時半を過ぎた。午前中からこの時間帯にかけて、今日はとても実りのある読書を行っていたように思う。自分の存在の随にまで染み込んでいくような骨身になる読書。

こうした読書を日々の生活の中で行っていかなければならない。そして、そうした日々を過ごしていくためには、自分の生活そのものをより組成していく必要があるだろう。意識的に組成し、意識的に日々を建築していく。それでいて、構築された日々は自然な全体となるようにしていく。つまり、組成された生命のようなものが日々に滲み出ている必要がある。今日の読書の内容は、科学と哲学を中心になされた。

哲学に関しては、二人の思想家の書物とゆっくりと向き合った。その結果、大いなる刺激と多大な洞察がもたらされたように思う。このようにして得られた刺激や洞察が自分の言葉として具現化されるまでには、もう少し時間がかかるだろう。刺激も洞察も熟成させる必要があるのだ。

ゆっくりと咀嚼し、咀嚼されたものをゆっくりと組み合わせていく試みが大切となる。焦ってはならない。全てをゆったりとした時間の流れにさらし、それでいて着実に進行させていく態度が必要になる

今日も少しばかり意識が構成的である。それは特殊な意識状態の一種だと言える。今朝方体験していた夢を見ない深い眠りの意識と何か関係があるのだろうか。とにかく、自分の内側でこれまで寝かせていた素材が一つの全体として形になるような運動を観察することができる。それがまさに自分

の内側で起こっている構成的な運動であり、それを可能にしているものが、あるいは、それを生み出している場のようなものがこの構成的な意識だと言える。

この建築的な意識状態はとても不思議なもので、音があり色がそこにある。形を伴った様々な色や音が、一つの全体として立ち現れていくのを目撃することができる。

今日は読書に十分な時間を充てていたが、それに応じて文章を書くことにも自然と従事していたようだ。読むことよりも書くことを優先させる。それは常に自分に言い聞かせていることである。世の中には、他者の言葉を読む人は沢山いる。だが、自分の言葉を書く人は驚くほどに少ない。

自分は書くことを優先させる。それが自分の人生を生きることに他ならず、それが自分なりのこの世界への関与の道だと知っているからだ。書こうとして書くことをしない。書くことに際して明確な意図も持たない。意図を持たないところから文章を書き、そこに明確な意図を込めていく。そうした形で文章を書く。とにかく、この世界で何とか生きるために、自分は書き続けなければならない。

書くことがますます生きることと同一のものになっていく。生きることは創造への積極的な参画であって、創造されたものを受動的に享受することではない。今日の自分は昨日の自分から創造され、明日の自分は今日の自分から創造されていることを忘れてはならない。私たちは、どこまで行っても創造的な生き物であり、創造を宿命付けられた生き物なのだ。

ここまで文章を書いてもまだ構成的な意識状態が続く。頭の中にある形を伴った音や色がまだ運動を続けている。フローニンゲン：2018/3/15（木）17:51

No.871: One and All

As Schrödinger articulates, our consciousness is not plural but singular. In fact, the plural form is unknown. It implies that our consciousness is one and all. Groningen, 10:51, Monday, 3/19/2018

2272. 数理モデリングの学習に向けて

数時間前に書こうとしていた事柄を今再び思い出した。その時は、冒頭に天気について書いていたのだが、主題はそれではないにもかかわらず、結局それが思わぬ主題を呼び込んだ。あの時に書こうしていたことを今思い出し、それをメモしておいた。それについてまた後ほど日記としてまとめておこうと思う。

天気と人間存在のダイナミックシステムとしての特性に関する話として、やはり私は、複雑性科学の分野、とりわけダイナミックシステム理論と非線形ダイナミクスの領域に関心があるのだと改めて思った。今年の研究においては、MOOCの学習効果に関して非線形ダイナミクスの手法を用いている。研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授に、私が現在の研究で用いている手法について口頭で説明する必要があった。

ツショル教授は熱心に私を指導してくれるのみならず、私の専門分野に関して私から学びたいという意思を強く持っていらっしゃる。前回のミーティングでは、非線形ダイナミクスの手法の一つである「トレンド除去変動解析」について簡単に説明した。今度のミーティングでは、「標準化分散分析」について説明をする予定だ。こうした説明の機会に際して、事前に何本も論文を読んでおくことは、私の理解をさらに深めることにつながっている。

例えば、前者の分析手法については、実はフーリエ変換が元になっていることを改めて先日知った。昨年取得した修士号は、欧米社会で言うところのサイエンス（理系）に該当するものであるが、私はもともとは日本で文系の大学を卒業している。振り返ってみると、当時の母校では大学二年までは数学が必修であり、微積分と線形代数を学んでいた。当時の数学は大学で習得すべき基礎的な事柄であり、フーリエ変換のような応用的なテーマを学ぶことはなかった。

今になって改めてこうした数学的なテーマについて理解を深めていくことは、大きな喜びを引き起こしていることに気づく。ここから私は、フローニンゲン大学のポール・ヴァン・ギアート教授やサスキア・クネン教授が開拓したように、人間の発達現象を数理モデルを通じて探究する道を焦らずに歩み続けたいと思っている。

自ら数理モデルの方程式を解くというよりも、方程式そのものを組み立てること、つまり発達現象や既存の理論を元に数理モデルを構築することに焦点を当てていきたい。そうしたことから、数理モデリングの方法に関して専門的かつ体系的に学びたいという思いが日増しに強くなっている。もちろん、クネン教授に師事をしてフローニンゲン大学でもそれを学ぶことはできるが、本格的に応用数学の教授から教えを請いたいと思っている自分がいる。学部時代に学んでいたような、方程式を解くということではなく、数理モデルを構築するという実践領域に特化する形で学習を進めたい。

人間の種々の能力の成長をシミレーションするためには、数理モデリングの技法は不可欠である。仮に今年の秋から米国の大学院で研究を続けられることになったら、応用数学の数理モデリングのコースを聴講したいと思う。フローニンゲン：2018/3/15（木）18:07

No.872: Research Ideas

From this September, I'll start a new research project that aims at revealing fractal developmental processes in music education. More specifically, the research utilizes nonlinear dynamics methods to investigate developmental processes of music composition skills. When I was taking a bath, I was thinking about what types of data I need to collect. I came up with some ideas of how to conduct such a study. It is time for me to shift my research focus. Groningen, 19:32, Monday, 3/19/2018

2273. 発達現象のシミレーションに向けて

今日は夕食を食べ終えたら、作曲実践に取り掛かるのではなく、まずは生物学の書籍を少し眺めたいと思う。精読をするのではなく、あえて眺めるという表現を使った。また、生物学の書籍というのも、これは数理モデリングの技法を学ぶためである。数ヶ月前にサスキア・クネン教授の論文を読んだ時に引用されていた生物学の書籍が大変素晴らしく、それは800ページを越す大著であるが、数理モデリングの技術を学ぶ上で非常に有益である。

本書で紹介されている数理モデリングの技法は、人間発達に関するモデリングを行う際にも非常に有益である。以前に本書を一読していたのだが、今日あえてもう一度全体の内容をさらっておきたいと思う。本書の内容は、一回や二回読んだだけでは理解できず、自分の研究や実務に適用する

という実践がなければ実用的な知識として定着しないことは確かだ。今後の研究や実務への応用に向けて、とりあえず今日はもう一度本書の全体観を捉え直す。

人間発達の研究に数理モデリングを活用することはまだまだ発展途上であるが、生物学の分野においてそれが進んでいることは私にとって朗報である。本書を眺めてみると、生命という複雑な現象を数理モデルとして記述し、そこから理論を構築したり、シミレーションを行うことが実際に行われていることを目の当たりにする。数理モデリングに関しては、これから本格的に学びを深めていく必要があるが、その可能性には大いに期待している。一方で、モデルというのは実際の現象の近似であるから、モデルと実際の対象とを混同してはならないことにも注意をしなければならない。

対象とする発達現象の本質に着目し、その本質が損なわれない形で他の諸々の要素を削ぎ落としていくことがモデリングの要諦である。言い換えると、本質の抽出と捨象がモデリングの核にある。今後研究や実務で人間の発達現象を数理モデルとして記述していく際には、観察事象の本質を見抜く眼を養っていかなければならないだろうし、既存の理論についてのさらに深い理解も求められるだろう。

前者は、自ら発達現象の本質を抽出してモデルを構築する際に大切となり、後者はすでにある理論モデルを応用する形で数理モデルを構築していく際に大切となる。とかく人間発達の研究においては、「理論モデル」と呼ばれるメタファーが数多く存在しており、その多くは未だ実証的に検証されていないことが多い。こうした既存の理論モデルを数理モデルに変換し、その正当性及び妥当性をシミレーション実験や観察によって検証していくことは大切である。なぜなら、そうしたシミレーションによる検証を経て、メタファーとしての理論モデルがより本質的な理論につながっていくからである。

ヴァン・ギアート教授がヴィゴツキー及びピアジェの理論モデルを数理モデルに変換して検証したように、クネン教授がキーガンの仮説的理論を数理モデルによって検証したように、私も他の理論モデルに対して同様のことを行う研究に着手したいと思う。それと同時に、今自分が取り組んでいるMOOCの研究を数理モデルの構築につなげていきたいという考えもある。クネン教授と再び協働研究をする日も近いかもしれない。

仮に米国の大学院に活動拠点を移したとしても、クネン教授がいつも快く述べてくださっているように、発達現象の数理モデリングについては是非とも協働研究を実現させたい。少なくともMOOCに関する研究においては、仮に数理モデルが構築されれば、それを検証するデータは十分にあるのだから。フローニンゲン：2018/3/15（木）18:27

No.873: Bridge For Tomorrow

The weather today is impeccably fine. Tackling one small piece of work while viewing the fine weather feels like walking on the bridge for tomorrow step by step. Groningen, 12:42, Tuesday, 3/20/2018

2274. 夢見の意識下の心象イメージと自己超越体験について

今日は六時半に起床した。起床してみると、昨日よりも少し暗く、辺りは若干侘しさを醸し出していた。それはおそらく、フローニンゲンの上空を覆う薄い雲のせいかもしれない。今日からまた気温が下がるようだ。本日の最高気温は3度であり、最低気温はマイナス6度である。日中は一定して2度ぐらいの気温のようだが、夜からは冷え込み、明け方にはマイナスの世界となる。

今日はインターン先のオフィスに行く日なので暖かい格好をしていこうと思う。天気予報を見ると、日中は雨が降らなさそうなのだが、帰り際の降水確率が少しだけ上がっていたため、今日は折り畳み傘を持参してオフィスに向かおうと思う。

今朝方、目を覚ます瞬間に、脳内で文献の要約のようなものが現れた。私は目を閉じながら、その要約を眺めていた。ちょうど意識がサトルからグロスに移行する過程だったのだろう。そうした移行過程においては、時々自覚的にこうした心象イメージを捉えることができる。振り返ってみると、こうした心象イメージを自覚的に眺めることが起こり始めたのは学部時代の頃だったように思う。今朝方眺めていた心象イメージは、おそらくここ数日間読んだ文献に関するものだろう。

サトルからグロスの意識に移行する際に立ち現れる心象イメージのほとんどは書籍や論文などの活字情報である。時には書籍を開いているような形で、一ページ一ページを夢見の意識の中でめくることができる。今朝方眺めていたのは、発達科学やシステム科学に関する情報だったと記憶してい

る。この数日間でそれらの分野に関する文献を読み進めていたため、夢の中でそれらの情報の整理が行われていたのだろう。

まさに、文献の要約リストを眺めていた時に、「情報というのはこのようにして脳内に整理され、そして格納されるのだ」という気づきを得た。それらの情報は脳内を流れていくのではなく、夢見の意識の中で、自覚的に読みたい箇所と読む速度を調節することができた。今朝方はそのような現象に見舞われた。それに付随して思い出したのは、昨夜の就寝時の体験である。

昨夜もまた、自己を超え出ていくあの感覚に見舞われた。これは過去に何度か経験しているものであり、とりわけ欧州での生活を始めてから定期的に起こるようになった現象である。自己が自己を超えていき、一人の固有な人間として自己がこの世界を生きていることに対して呆気にとられ、微笑が漏れる体験である。昨夜のそれはこれまでとは異なる点があった。

それは、自己が自己を超えて行った後、自己がこの世界に仕えているという感覚が明確になったことである。「世界に仕えながら生きる」というのは、ここ最近私の中で主題として立ち現れていたものであり、それがより明確な体験として実感させられたのが昨夜の出来事である。

自己がこの世界を生きていることの奇跡。そして、そうした固有の自己が世界からの促しに応じる形で、この世界に積極的に参与する使命を与えられているということの明白性。この体験を私は超越的なまなざしで観察しており、その体験は、時間としてはいつも以上に長かった。もしかすると、今後この体験を積み重ねていくごとに、体験時間が増し、より明確にその体験が示唆することを通じてこの世界を生きていけるようになるのかもしれない。昨夜から今朝方にかけて非常に多くの示唆を得たように思う。フローニンゲン：2018/3/16（金）07:16

No.874: Merciful Days

Merciful days have been passing by in my daily life. I suppose that today will be also saturated with both solace and celebration. Groningen, 08:17, Wednesday, 3/21/2018

2275. インターン12日目の朝

書斎の窓から裸の街路樹を眺めてみると、今日は少しばかり風があるようだ。強い風では決してないのだが、外に出てみれば風が吹いていることを体感できるぐらいの緩やか風がフローニンゲンの街を駆け抜けている。

今日で研究インターンも12日目を迎える。毎週二日ほどオフィスに通っていたため、今日で六週目のインターンが終わる。辺りを吹き抜ける風と同様に、インターンもどこか駆け抜け行ったような印象を持っている。私がインターンの中を駆け抜けたのか、インターンが私の中を駆け抜けたのかはわからない。おそらく両者であろうか。それとも、両者を止揚した現象としてそれを捉えることができるかもしれない。

いずれにせよ、インターンも残すところ来週で最後となった。振り返ってみると、今週の月曜日は自宅でデータ分析を粛々と進めていた。そのおかげもあり、インターンの開始時に計画していた全ての分析を完了することができた。ここからは新たな分析を行うのではなく、分析結果の解釈に時間を充て、それらの分析結果を一つのレポートにまとめていきたい。

ちょうど今日の午前中に、二人のアドバイザーとミーティングがあり、先々週に行った一つ目の分析結果について報告をする。昨夜、ミーティングで用いるための資料として、五ページほどの分析レポートを二人に送っておいた。今日のミーティングではそのレポートを参照しながら、分析の目的、分析の手順、分析手法の説明、分析結果とその解釈、そして実務的なインプリケーションについて説明を行う。このミーティングで再び二人から何かしらのフィードバックがもらえるであろうから、それを参考にする形で、残り二つの分析結果をまた新たなレポートとしてまとめていきたい。

そのまとめは、できれば今日の午後に完成させたいところである。分析結果のレポートが作成できれば、あとやるべきことは二つほどだろう。一つは、今後他の研究者やアナリストが私が行ったのと同じ観点でデータ分析をRで行う場合を想定して、私が書いたRのコードを整理してワードファイルにまとめておこうと思う。それを共有フォルダに保存しておくことにする。これを行えれば、今回の分析が自分の中で完結するのではなく、他者も同様の分析を行うことができるようになるだろう。これが一つ目である。

二つ目は、インターンを締め括るために提出が義務付けられているインターンレポートなるものを執筆する必要がある。これはコースの期末レポートのようなものであり、インターンマニュアルを眺めながら必要な項目について執筆を進めていきたいと思う。どのような項目について文章を執筆していくかについてはすでに大体把握しており、毎回のインターンの際に書き留めていたリフレクションジャーナルを参考にしていけば、このレポートはそれほど苦労することなく書き上げることができるだろう。インターンの最後にこうした大きなまとめのレポートを書くことは、全七週間の自分の研究を再度振り返る上で非常に有益だろう。そして、こうした振り返りが、ここからの研究の礎となっていく。

自宅を出発するまであと一時間半ほどとなった。出発に向けてまだ時間があるので、早朝に取り組めることは全て今のうちに取り組んでおきたい。早朝の時間はとても大切だ。フローニンゲン：2018/3/16（金）07:35

No.875: Group Assignment

I participated in a lecture about digital learning today. Since the next lecture is our presentation, today's lecture was the final one. Today, I obtained some insights about simulations and animations in the digital learning environment.

After the lecture, I had a lunch meeting with my friend. We discussed our group assignment. The meeting was very productive as usual, so we determined the next steps to complete our paper. I'll work on how to redesign the targeted digital learning environment from the perspective of the segmentation principle. I'll then make a storyboard to illustrate how to improve the learning design. This is what I'll do on Saturday. Groningen, 16:29, Wednesday, 3/21/2018

2276. ダイバーシティの問題と相対主義的段階の問題

季節が冬と春を行ったり来たりしているのを実感する。季節はどうやら揺れているらしい。その様子を観察してみると、まさに季節は人間と同じであるように思える。季節も私たちも共に、揺れながらにして進んでいくのだ。これまでの季節は完全に冬という安定状態にあった。そこから様々な要因の影響を受けて、安定状態から次の状態に向かって進み始めている。季節が今経験している大きな

揺れは、次の状態に向かうために経験しなければならない現象なのだ。季節はあと少しで春となる。そんな希望を胸に抱く。

ここ最近、自分の内側から泉のようなエネルギーが湧き上がっていることに気づく。それは何か激しいものというよりも、静かでありながらも無限に沸き立つエネルギーだ。これはもしかすると、私たちが持つ生命の根源的なエネルギーなのかもしれない。季節が春に近づいていることと、こうしたエネルギーを感じていることには何か関係があるのかもしれない。生命の躍動を感じられる季節に向けて、今日も一つ一つ、自分の取り組みに従事していきたい。

昨日、久しぶりにスティーヴ・マッキントッシュの“Integral Consciousness and the Future of Evolution (2007)”を最初から読み返すことにした。確かこの夏に一度、途中の数ページを読み返すことがあったが、一度通して読んだのは私がジョン・エフ・ケネディ大学に在籍していた頃であるから、今からもう七年前ぐらいのことになる。昨日から、本書を最初から読み返し始めた。読み進めてみると、いろいろと新たな発見があり、自分の考えをさらに深めてくれる記述が豊富にあることに気づいた。

マッキントッシュの文章を読みながらいくつか考えていたことがあった。その中でも、発達心理学者のハインツ・ワーナーが提唱した発達の原理「差異化と統合化」について思うことがあった。これまで明記していなかったが、差異化というものが病理的な形で推し進められるとそれは「分離」を招くという点を押さえておく必要があるだろう。つまり、健全な形でなされる差異化は、新たな自己を創出していく上で不可欠なのだが、病理的な形で過度に推し進められる差異化は分離を招いてしまう。

これは自己を創出するというよりも、自己を破壊する現象として捉えることができる。一方で、統合化に関しても、それが病理的に推し進められると、「融合」という現象を招く。発達現象における融合とは、二つ以上のものが単に合成されるだけであり、そこから新たな機能や価値を生まない現象のことを指す。これら二つの点についてはこれまであまり説明していなかったように思う。

ここからもう少し踏み込んで考えると、そもそも差異化や統合化が「病理的な形で推し進められる」というのはどういう意味なのだろうか？端的に述べると、以前の発達段階の何を引き継ぐ必要があり、

何を引き継いではならないのかの峻別ができていない状態のままに差異化や統合化を行ってしまうことが、「病理的」という言葉が指す意味である。

発達とはまさに「含んで超える」という原理に基づいてなされるものだが、何もかも含んでいけばいいかというとそうではない。そこには含んではならないものが存在しているのである。それを見誤る時、差異化も統合化も病理的になされ、それが分離や融合を招く。特に後者に関しては、ポストモダン的な発達段階（後慣習的段階・相対主義的段階）が陥りやすい現象である。ポストモダンの病理的な側面はまさにそれであり、これは昨今企業組織の中でも顕在化しつつある。例えば、ダイバーシティの推進というのはその一例になりうる場合がある。

企業社会において多様化が叫ばれているが、これはポストモダンの病理的な側面として現れている可能性があることに注意が必要だろう。つまり、多様性を受け入れることを盲信するあまり、多様な個人を単純に受け入れる動きが見られる点には注意を要する。そもそも個人とは多様性のある存在であるが、そうした多様性を持つ個人の発達課題や病理的側面を峻別することができないままに、多様な個人を受け入れようとしてもそれはうまくいかないだろう。おそらくそれは、多様な個人の単なる寄せ集めに過ぎず、融合の範疇にとどまり、多様な個人が相互作用を生み出すような統合には至らないだろう。

多様性を受け入れるにあたって、個人の特性や各発達段階が持つ固有の価値の重み付けができていない社会的な状況を見てみると、ポストモダン的な（相対主義的な）発想の罠に多くの人や組織が絡め取られているように思える。確かに、ポストモダンの発想の枠組みは、この現代社会においては高度な発達を遂げたものなのだが、結局その段階の発想の枠組みでは、多様性を認めるだけ認めておいて、多様な個人への具体的な関与方法や仕組みを考案するに至らない。そして往々にして、多様性を真に引き受ける責任感に欠ける。

発達現象に潜む病理的側面を見抜く洞察を獲得すること、および低次の段階を誤って大きく価値付けてしまう「前超の虚偽」に陥らない形で各段階の価値の重み付けを行えることは、とりわけ相対主義的段階に突きつけられた発達課題であるように思う。ダイバーシティの問題というのは、まさに相対主義的段階の課題を解決することでしか乗り越えていくことができないように思える。フローニンゲン：2018/3/16（金）08:10

No.876: Research Progress

I had a meeting with my supervisor about my research. This research meeting is always thought-provoking, and so today's meeting was. I could clarify what I'll do next. My next step is to find a couple of articles for each of the three metrics that I'll utilize in my research. I should carefully investigate articles to validate the use of these metrics. I'll work on it this Sunday.

In addition to finding some articles, I want to investigate the possibility to apply the notion of semantic distance, which my supervisor introduced me today. Although I have to avoid complex semantic analysis in this research, I can apply the essential idea of semantic distance. What I need to do is to grasp the definition of the concept and the way of computing data. I'll search some articles on the topic this Sunday. Groningen, 16:39, Wednesday, 3/21/2018

2277. 地味さと尊さが息づく研究

先ほど、インターン先のオフィスで昼食を摂り終えた。今日はまた冬の寒さが舞い戻ったような日である。早朝にオフィスに向かう時も寒さを感じ、さらに今日は風もある。先ほどキャンパス内のスーパーに昼食を買いに行った時も、外の気温がとても寒く感じられた。

午後からの研究に取り掛かる前に、午前中の取り組みについて振り返っておきたい。今日は朝一番に、ジャン・フォルカート博士とエスター・ボウマ博士と三人でミーティングを行った。ミーティングの目的は、私の研究の進捗を報告することである。昨夜送った分析レポートを元に、分析の背景と結果について私の方から説明をした。今回のレポートは、厳密な科学論文の体裁をとっていなかったため、ミーティングの随所で様々な質問を浴びることになった。特に、今回の調査を進めるにあたっての理論的なフレームワークは何であり、そもそもどんな仮説のもとに今回の分析を進めているのかについてこちらから説明する必要があった。

今回のレポートではそれらを詳細に盛り込むことをあえてしなかったのだが、もしかすると全てを文章化しておいた方が良かったのかもしれないと後になって思う。とりわけ、二人からの質問とフィードバックはどれも有益であり、ここからさらに分析の観点を洗練させていきたいと思う。今回の研究を進めているのは私なのだが、フォルカート博士とボウマ博士の二人が議論を戦わせる場面が何度

かあり、研究の当事者でありながらも私はその光景を面白く眺めていた。どの分野であれ、博士号を取得した者の科学的な思考からは学ぶことが多く、彼らの議論の仕方には参考になることが多い。

ミーティングが終わると、そこからは二人のフィードバックを元に分析を改めて行うことにした。そのために、集めたデータを別の観点から整理し直した。午前中から昼食前にかけては、データの再整理に全ての時間を費やした。これはその先のデータ分析において不可欠な作業なのだが、とても地道な作業だ。

自分のPC画面とにらめってこしてデータの整理をしている最中、この地道な作業の敬虔さについて思いを馳せていた。科学研究とはつくづく地道な作業の積み重ねであり、一つ一つの作業は田植えを行うかのようだ。一つ一つの作業はどれも不可欠でありながらも地味であり、地味でありながらもそれらを積み重ねていくことによって、研究という一つの命が育まれていくかのように思えてくる。午後からも引き続きデータの整理を行い、それが完了次第データ分析を改めて行いたい。データの整理もデータの分析もどちらも共に地味でありながら、それらの中には尊さが息づいている。フローニンゲン：2018/3/16（金）13:36

No.877: Effectiveness of Schematic Representations

Interestingly, people are better able to obtain understanding of principles from real world examples, but they learn more from schematic representations than from realistic representations. Some research suggests that realistic animations are not so effective for learning. Instead, offering schematic animations is more effective for learning. Groningen, 17:12, Wednesday, 3/21/2018

2278. 疲弊の原因とその対策

昨夜から激しい風が吹き始め、今朝は強風の音に目を覚ました。起床直後、寝室の窓の向こうから風の轟音が聞こえてきた。起床した六時半にはすでに空が明るくなっている。ちょうど来週の日曜日の深夜から欧州はサマータイムに入る。日照時間は順調に伸びているようだ。一方で、気温に関しては相変わらず低い。今の気温はマイナス3度であり、今夜にはマイナス7度に到達する。裸の街

路樹が激しい風に揺られ、カラスがカァーカァーと鳴いている。今朝は他の小鳥の鳴き声が聞こえない。

昨日、インターン先のオフィスから自宅に戻ってきて夕食を摂ると、そこからは何かをする気力がなかった。専門書や論文を読んだりする気力もなく、新しく曲を作る気力もなかった。また、日記を執筆することもできなかった。オフィスとの往復に合計で一時間ぐらい歩いているのだが、それによる疲労だろうか。

しかし、それくらいの歩行であればいい運動に過ぎず、実際に私は定期的にそれ以上の距離を走っている。そうしたことを考えると、疲れの要因は他のところにあるようだ。やはりオフィスという他の人たちがいるところで働くことに疲労感を感じるのかもしれない。興味深いことに、同じフロアで働く人は少なく、私一人に一つの部屋が与えられているのだが、それでもオフィスという空間は私にとって心底落ち着ける場所ではないのかもしれない。

環境としては申し分ないほどに快適なのだが、精神的な落ち着きつは、物理的な環境の快適さを超えた要因によって生み出されるのだろう。インターン先でも相変わらず、昼食後少ししてから仮眠を取るようにしている。部屋の中にソファがあり、そこで昨日も少しばかり仮眠を取っていた。そうしたことから考えると、オフィスでは随分とくつろぐことができているように思うのだが、やはり何か引っかかるものがあるように思える。

自宅の書斎にいる時は、意識的に科学研究だけではなく、様々な探究や実践を行うように心がけている。一方、インターン先のオフィスではどうしても科学的な研究だけに集中してしまう。特に、昨日もずっとデータ分析ばかりを一人で黙々とやっていたことが、もしかしたら昨夜の何とも言えない疲労と関係しているのかもしれない。今回のインターンの趣旨と目的として、データ分析に焦点を当て、科学研究だけに集中するというのは当然と言えば当然である。

だが、仮に今後どこかの大学に所属して研究をすることになれば、オフィスの中でも積極的に科学研究以外のことにも従事したい。音楽を聴きながら研究をするだけではなく、実際に休憩として作曲をしてもいいだろう。日記についても、日本語でもいいからもう少し積極的に文章を執筆するとい

うのもいいだろう。昨日の件から得られた示唆は、どうやら私にとって、複数の実践領域を行き来することが心身を最も健全に保ち、心身を最も活性化させることに繋がるようだ。

一つの実践領域に邁進することは十分に尊いが、仮にそれによって心身が疲弊をしてしまっては元も子もない。今日は土曜日ということもあり、ゆっくりと複数領域の実践に従事したいと思う。そうした形で自分のライフワークを進めていく。フローニンゲン:2018/3/17(土)07:11

No.878: Developmental Processes of Aesthetic Experience and Music Composition

My zest for investigating developmental processes of aesthetic experience and music composition emerged again. My approach would be delving into how meanings of beauty in a specific domain (e.g., music) evolve and how people acquire music composition skills. Both can be examined in a qualitative and quantitative way by making use of developmental and complexity science perspectives. Because I purchased some books for my future research on aesthetic and music, I'll be able to come up with some concrete ideas of how to collect and quantify data. Groningen, 17:30, Wednesday, 3/21/2018

2279. 夢の中の美的世界

昨日はある時間帯にとても静かな風が吹いていた。それは寡黙な風であり、どこか私を敬虔な気持ちにさせてくれた。一方、今日は激しい風が吹いている。初冬に吹く木枯らしのように鋭さがある。小鳥たちもこの鋭い風を嫌ってか、今朝は彼らの鳴き声が一切聞こえてこない。冷たく激しい風が吹いている状況にあって、朝日だけはとても穏やかな色を発してくれている。赤レンガの家々の窓が、朝日の優しい光を反射している。

書斎の窓の外の景色を眺めながら、今朝方に見ていた夢について少しばかり思い返していた。最も印象に残っている場面は、私が巨大な書店にいて、立派な本が無数に並ぶ大きな本棚の前にいたことである。そこで私は何か本を選ぶというよりも、単に背表紙を眺めていた。背表紙の美しさとタイトルの文字が生み出す美しさとが相まって、二重の美に包まれているような感覚があった。

ちょうど私の近くに黒いソファーがあったので、そこに腰掛けながら本棚を眺めることにした。しばらく一人で本棚を眺めていると、左の方から誰かが歩いてこちらに近寄ってくるのが見えた。そちらの方を向くと、なんと発達心理学者のハワード・ガードナー教授だった。ガードナー教授は優しい笑みを浮かべながらこちらに近づいてきた。

ガードナー教授は、「何をしているのか？」と私に尋ねてきたので、「美しい本をただ眺めている」と私は答えた。すると、ガードナー教授は何か納得したような表情を浮かべていた。私たちはもう少し言葉のやり取りをして、各々、本の背表紙に見入る状態になった。しばらくすると、ガードナー教授がその場を立ち去った。その際に、「今からいいものを見せてあげよう」と述べた。ガードナー教授が立ち去った後も、私は相変わらずソファに腰掛けながら、同じ場所で同じ本棚を眺め続けていた。

そこからしばらく本棚を眺め続けていると、ガードナー教授が何人かの青年を引き連れてフロアに戻ってきた。私は本棚から視線をそらし、ガードナー教授の方に目を向けた。どうやらガードナー教授は、青年たちに本の魅力を伝えているようだった。時に一冊一冊の書籍を手に取り、それぞれの書籍の内容について解説をしている。とても該博かつ教育熱心な教授だと感銘を受けながら、私はずっとガードナー教授の様子を眺めていた。すると、ガードナー教授と青年たちが徐々にこちらの方に近づいてきた。

ガードナー教授が、私がそれまで眺めていた本棚の横の本棚の書籍について説明をし始めた時、不思議なことに気づいた。隣の本棚に陳列されている書籍の色とタイトルには規則性があり、ある一箇所のパターンを解析してみると、それが私の名前になっていることに気づいた。

ガードナー教授がおそらくその規則性を生み出したのだと思われ、彼の粋な計らいにとても感謝した。さらに興味深いのは、その規則性を解析してみると、私の氏名のうち、名に関してはローマ字表記なのだが、氏に関してはギリシア語表記になっていた。ガードナー教授が私の氏名が隠された書籍の箇所を青年たちに説明する際に、こちらに向かって微笑んだ。それに対して私も微笑み返した。

© YOHEI KATO 2018

書籍の色とタイトルに規則性を持たせ、氏名が浮かび上がってくるというのは本当に粋な計らいである。ガードナー教授と笑みを交換した後、私はもう一度自分の目の前の本棚を眺めた。すると、そこに置かれていた本の陳列は先ほどと異なっていることに気づいた。さらに、私の真ん前の書籍たちが、またしても自分の氏名を示唆するように並んでいることに気づいたのである。

それらの書籍はどれも美術書で構成されていた。構成されている書籍の一冊はとても大きく、それは面陳列されていた。そのため、私はその書籍の面の絵柄を眺めることができた。欧州のどこかの国の川がそこに描かれており、川の両岸には多様な種類の美しい花々が咲いていた。川の上に浮かぶボートの上には二人の男女が語らっている。そのボートは、川を架ける白い橋の下をくぐり抜けようとしている。私はしばらく恍惚とした状態にあり、一つの絵画作品と評してもいいであろう書籍の面表紙を眺めていた。

そこに描かれている美的世界から再び意識がこちらの世界に戻ってきた時、隣で青年たちに説明を続けているガードナー教授の方を再び見た。すると、ガードナー教授はまたしても笑みを私に投げかけた。それに対して、私も笑みで応えた。フローニンゲン：2018/3/17（土）07:39

No.879: Aesthetics of Music

I found a number of intriguing articles in the British Journal of Aesthetics. My recent interest is aesthetics of music. Thus, this journal offers ample articles that satisfy with my intellectual──existential and spiritual──needs. I downloaded several articles, and I'll read them today. Groningen, 06:37, Thursday, 3/22/2018

2280. メンタルモデルの構築支援

今日はこれから午前中に、知り合いの方とその方に紹介していただいた方々とオンラインでミーティングをする。非常に意義のあるプロジェクトにお声掛けいただき、それについてお互いに意見交換をさせていただく予定になっている。許容量を超える形でプロジェクトの数を増やすことは賢明ではないが、何か役に立つことができるのであれば、できるだけ様々なプロジェクトに参画させていただこうと思っている。社会の具体的な課題の解決に向けたプロジェクトに参画することが、私のライフワークの重要な一端を担っており、協働プロジェクトへの参画は、人間としての私の成熟に大きな影響

を与えている。協働プロジェクトを通じて、社会に関与していくことと人生を深めていくこと。今の私はそれを何よりも大切にしている。

今朝方、起きてすぐにいつものように歯を磨いていると、成長支援コーチングの際に自分が行っていることについて振り返っていた。クライアントのメンタルモデルを理解することを通じて対話を行うだけではなく、今後はクライアントが独自のメンタルモデルを自己及び外側の現象に対して構築できるように意識的に支援をしていく必要がありそうだ、ということに気づいた。いや、おそらくこれまでもそうした支援をしていたのだと思うが、それは無意識的な関与であった。これからは明示的にそれを促すような対話のあり方を模索したい。

クライアントが抱える課題に対して、クライアント自身が独自のメンタルモデルを意識的に構築し、それを可視化することを支援していく。そのメンタルモデルは完成されたものではなく、実際の仕事を通じて検証されるものであり、検証によって絶え間なく変化・洗練されていくものである。そのようなことを考えていると、昨日に読もうと思って書見台に置いていた書籍について思い出した。その書籍はシステム科学に関する専門書であり、ちょうどモデルに関するページを開いて書見台の上に置いていた。

今日は、モデルとはなんなのかについてもう一度理解を深めるためにその箇所を中心に本書を読み進めたいと思う。ここ数日間において、本棚から複数の書籍を書斎の机の右隅に積み重ねている自分がいた。今日と明日を使って積み重ねられた書籍をゆっくりと読み進めたいと思う。それに並行して、作曲実践も積極的に行っていきたい。そんな土日にしたいと思う。フローニンゲン：2018/3/17（土）07:56

No.880: Priority

Although I am passionate about aesthetics of music, I should be careful with not to be just a scholar about the field. My essential zest resides in music composition. I prefer creating music to constructing philosophical argumentation about music. The most important priority is composing music. Groningen, 06:50, Thursday, 3/22/2018